

ろとも焼酎を飲む機会はあるけれども、おなじ分野の研究者と研究について語り合う機会はほとんどない。そして初島先生は飲み助ではなかったらしい。Index Kewensis などと言う植物分類学にとってはもっとも基本的な文献さえ南九州ではなかなかお目にかかれない。そのような環境で、初島先生はこつこつと文献を集められ、研究を展開され、多くの業績を積み重ねられた。初島先生は故郷の島原半島にも帰らず（お骨は島原半島の故郷のお墓に埋葬された）、鹿児島で永い生涯を終わられた。九州から南西諸島の植物相の解明に後半生をかけられた先生らしい生涯だった。

初島先生が集められた膨大な標本や文献は鹿児島大学総合研究博物館に寄贈されること

となっている。これら資料が研究に有効に利用されるように整理され、活用されることを願いたい。

なお琉球大学の横田昌嗣教授は「初島住彦博士の業績目録」（1931–2007）を沖縄生物学会誌46：5–22にまとめられている。この横田先生の「業績目録」はほぼ完全で、私と丸野敏勝さんとで、初島先生が自宅に残されていた別刷りを整理したが、わずかな追加があっただけである。もし、僅かな追加を加えた業績目録を必要とする人は私に（mitsuru.hotta@mb9.seikyuu.ne.jp）メールでお申し込みください。（890-0063 鹿児島市鴨池 1-5-9 西南日本植物情報研究所）

島袋敬一：初島住彦先生のこと

Kei-ichi SHIMABUKU: Professor Sumihiko HATUSIMA

近頃植物分類学者の方が相次いで亡くなられた。そして2008年1月22日朝のこと、電話があり、御遺族女性の方からなくなられたと、満101歳でしたとのこと。暮の頃より点滴を受けておられたとは伺っていた。生前おれは記録をたてるんだと話しておられた。まさに大記録。

先生の御経歴は沖縄生物学会誌14号（1976）に詳しい。昭和17（1942）年徴用されてジャワのボゴール植物園に陸軍司政官として赴任された。そこで旧知の大井次三郎博士（1905–1977）と親交を深められた。やがて終戦となり、使役を課されるようになった。先生はあまり丈夫でない大井博士をいたわって代わりを勤められた。1971年に「琉球植物誌」が出版されたとき、1972年2月9日の朝日新聞に「先に出されている大井『日本植物誌』と合わせて日本列島の植物誌は一応完成した」と評されている。

先生は運動神経にすぐれておられた。与那国島での採集行でのこと、水牛のそばを歩いておられたら、水牛がモー然と襲ってきた。皆があぶないと叫んだら、走って避けられた。若い時は速かったと話しておられた。

先生は招聘教授として昭和30（1955）年4月から約4ヶ月琉球大学で講義をされた。その頃は集中講義の形態ではなく、講義のない時には沖縄各地で採集された。その成果は天野鉄夫氏と共著で「沖縄植物目録」として出版された（1958）。大正13（1924）年に出版された坂口総一郎氏の目録以来の快挙である。さらに1967年には「沖縄植物目録」の改訂版が出された。

1977年には目録は稿を改め奄美の植物を加えて琉球植物目録となって出版された。1994年にはその増補訂正版を先生単独で出された。

先生は鹿児島大学では造林学を講じておられた。分類学を講義されたのは1955年の琉球大学で最初と拝察した。ノートを作られ張切って話をされた。

ここで先生の御経歴を簡単に辿ってみよう。昭和47（1972）年鹿児島大学を定年退職され、名誉教授に叙せられた。同時に琉球大学教授に任ぜられ理工学部生物学科に勤務、昭和50（1975）年退職された。在任中は標本室の整備に精力的に取り組まれた。

(903- 那覇市)